

原著：秋田大学医学部保健学科紀要12(1)：37-47, 2004

看護大学生の障害者福祉援助実習における障害者に対する印象と実習からの学び

長岡 真希子* 山路 真佐子* 小笠原 サキ子*
宮越 不二子* 池田 信子* 柳屋 道子**

要 旨

ヒューマン・サービスに携わる初年次学生の体験学習として、本看護学専攻1年次70名(女子62名, 男子8名)を対象に、入学して6ヶ月経過後の9月に、身体障害及び知的障害者施設で3日間の障害者福祉援助実習を行った。本研究では、この実習前後において障害者に対して持っている印象と実習を通しての学びを明らかにすることを目的に、学生に対し実習前と実習後の印象、実習に対する期待とその学びについて質問紙調査を行った。その結果、実習前にもっていた障害者に対する印象のほとんどは否定的な印象であったが、障害者援助の見学と実践という障害者との接触体験を持ったことによって、実習後の印象は肯定的なものが多くなったと考えられる。実習に対する期待としては、記述数は少なかったものの、コミュニケーションと接し方、援助方法、障害者の生活実態などが挙げられ、これらは障害者の関わりによって概ね学ぶことができていた。また、実習の学びに対する記述内容が多岐に渡っていることから、期待していたことに留まらずそれ以上に学びを深め、自ら広がりを持たせることができたと考えられる。

I. はじめに

「障害者」を対象にした見学実習により対象理解、看護者の姿勢態度、看護援助方法の特徴などの学びが得られることが報告されている¹⁾。また、対障害者態度、イメージの変化について「障害者」との接触体験が関与すると考えられ、さまざまな角度から検討されている。その中で「障害者」に対するイメージは概ね、実習前の否定的なものから肯定的・好意的なものへと変化していることが報告されている^{1)~5)}。奥宮²⁾は看護学生の障害者観について、「対象者に対して直接的援助行動を行ったり、障害の受容ができるように働きかけることは、学生自身が自分の価値観や障害に対するイメージを変え、対象者の障害を自分のものとして考えることである」と述べている。また、明智³⁾は、健全な医療者の持つ対障害者態度が受容的であることは障害者の社会復帰にとって重要であると述べている。そこで、本学看護学専攻で行った障害者福祉援助実

習におけるレポートをもとに、障害児・者（以下、障害者とする）に対する学生自身が捉えた印象及び学生の学びについて検討することにした。

本実習は、ヒューマン・サービスに携わる初年次学生の体験学習として、入学して6ヶ月経過後の9月に、身体障害及び知的障害者施設で3日間行われた。実習の目的は、障害をもつ人たちと接し、関わり、人間的な触れあいを体験すること、施設生活の現状から人間的に生きることを学び、その視点を今後の学習の素材としていくことである。入学して初めての実習であり、特にこの時期は看護や医学の専門的知識がほとんどないことから、新鮮な目で障害者の生活を捉え、お互いが人間としてのかかわりを持ち、また施設における様々な場面から、学生は大きな影響を受けたと考えられる。本学は2002年10月に改組され、医学部保健学科となり、2003年4月に入学した第1期生が行った実習であり、次年度も実施予定である。本実習の学習効果をあげる

* 秋田大学医学部保健学科看護学専攻

** 国際医療福祉大学看護学科

Key Words: 障害者
看護学生
体験学習
印象
福祉援助実習

ための資料とするためにも、学生が対象をどのように理解したか、また何を学ぶことができたのかを知ることが重要であると考え。

[用語の操作的定義]

- ・対障害者態度：一般的には障害者に対する態度全般を示すが、先行文献¹³⁾を元に、ここでは主に障害者に対する受け入れ方、反応を示すこととする。

II. 目的

障害者福祉援助実習前と実習後において障害者に対して持っている印象と、実習を通しての学びを明らかにする。

III. 実習の概要

看護学専攻1年次70名(女子62名, 男子8名)をA班34名, B班36名の2クールに分け実習を行った。実習目標は、身体障害, 知的障害などを持つ人に対する学

生自身の理解や認識を明らかにすると共に、様々な障害をもつ人に対する援助活動を実際に見学し、福祉施設の目的を理解し、生活する人のニーズを捉えることである。実習スケジュールとしては、どちらの班も複合施設を多く持つ県内の心身障害者総合援護施設での見学実習1日と、さらに県内8カ所の以下に挙げる障害者施設にて、2日間3～6名に分かれ、作業、日常生活援助などの見学・体験実習を行った(表1, 表2)。

[実習施設の種類の] ()内は施設数

知的障害者更生施設(2), 知的障害者授産施設(2), 重度身体障害者授産施設(1), 身体障害者療護施設(1), 重度身体障害者更生援護施設(1), 知的障害児児童福祉施設(1)

IV. 研究方法

1. 対象

看護学専攻1年次学生70名(18.66±0.57歳)。実習前に障害者との接触経験の有無を聞いたところ「あり」

表1 障害者福祉援助実習日程(平成15年度)

期 間	9/22(月)	9/23(火)	9/24(水)	9/25(木)	9/26(金)
A班 34人	各施設での実習 8カ所	(祭日)	各施設での実習 8カ所	総合援護 施設見学	記録整理
B班 36人	総合援護 施設見学	(祭日)	記録整理	各施設での実習 8カ所	

表2 おもな障害者援助の見学と実践内容(学生のレポートより抜粋)

見学したこと	実践したこと
作業訓練	コミュニケーション
作業療法訓練	車いすの操作体験・介助の方法
水浴訓練	一部入浴介助
機能訓練	食事介助
食事の準備	シーツ交換
食事介助	洗濯、部屋の掃除
入浴介助	入浴後の衣服着脱・整容
市街地訓練体験	排泄介助
シーツ交換	片手作業訓練・利き手作業の体験
車いすの操作	歩行訓練介助
援助活動見学	観察の仕方
	ゼリー状食事の試食
	障害者と共に作業(補助・体験)
	袋詰め
	刺し子
	袋づくり
	手芸
	麵の計量
	縫い物
	袋のシール貼り
	コースターづくり
	はんこ押し
	木工作業
	段ボール貼り付け
	灯籠づくり
	フルーツキャップの袋詰め
	貼り絵
	園芸
	牛のえさづくり
	卵洗い
	牛舎掃除
	椎茸販売
	軍手縫製作業
	ビーズの糸通し

と答えた学生が57名(81.4%)、「全くなし」と答えた学生は4名(5.7%)、回答なし9名(12.9%)であった。

2. 方法

実習終了1週間後、設問1「障害者の方に対して実習前に持っていた印象は、実習後どのように変わりましたか?」、設問2「実習前に期待していたことが実習によってどのように学びましたか?」という二つの設問に対し、回答を自由記述によって得た。この場合、調査主旨と実習評価には一切関係のないことを口頭及び書面で説明し、研究に対する協力の得られたものを採用した。

3. 分析方法

各設問の記述内容について、一文節ごとに区分したものをカード1枚とし、その意味内容を研究者間で十分に検討しながら、KJ法に準じて前後の文脈を考慮しカテゴリー分類した。その後、類似しているものに対し、先行文献^{1)~9)}を参考にしてそれぞれ項目名を設定し、分析、考察した。

V. 結果

調査用紙配布数70枚に対し、回収数70枚、有効回答率100%であった。

1. 実習前後の障害者に対する印象

実習前の印象を記述していたものは59名、実習後の印象を記述していたものは70名であった。これらの記述内容を分類、整理すると、実習前の印象のカードは89枚、実習後の印象のカードは146枚であった。

1) 実習前の印象

実習前の印象の89枚について、関連性のあるものを表3にまとめた。

実習前の印象は、小項目で13項目、大項目で3項目に分類された。それぞれ、「怖い」、「暗い」、「かわいそう」、「明るい」、「内向的」という障害者に対してもつ感情を表しているもの29枚、「話が通じない人」、「何も出来ない人」、「援助が必要な人」、「普通の人とは違う」、「劣っている」という障害者の生活能力を表しているもの46枚、「抵抗感」、「接したくない」、「偏見があった」という対障害者態度を表しているもの14枚であった。「明るい」を除き、すべてが否定的な印象であった。

2) 実習後の印象

実習後の印象の146枚について、関連性のあるものを表4-1、表4-2にまとめた。

実習後印象は、小項目で13項目、大項目で3項目に分類された。それぞれ、「明るいイメージ」、「素直でやさしい」という障害者に対してもつ感情を表してい

るもの33枚、「話が通じる」、「自分のことは自分で出来る人」、「やろうという意志のある人」、「援助の必要なきに援助」、「可能性を持っている」という障害者の生活能力を表しているもの45枚、「特別の人間ではない」、「真剣な生き方」、「個性をもっている」、「勇気をくれた」、「偏見が消えた」、「障害をもって社会で生きる」という対障害者態度を表しているもの68枚であった。

2. 実習への期待と実習からの学び

実習への期待について記述していたものは36名、実習からの学びについて記述していたものは69名であった。これらの記述内容を分類、整理すると、記述カードは実習への期待が38枚、実習からの学びは130枚であった。

1) 実習への期待

実習への期待を記述した38枚について関連性のあるものを表5にまとめた。

実習への期待は小項目で7項目、大項目で3項目に分類された。それぞれ、「障害者とのコミュニケーションと接し方」、「援助方法」、「自分が役に立つこと」、「偏見をなくす」という障害者に対する自分自身の行動に関するもの29枚、「障害者の生活実態を知りたい」という障害者の生活に関するもの4枚、その他5枚であった。

2) 実習からの学び

実習の学び130枚を関連性のあるものとして表6-1、6-2にまとめた。実習による学びは、小項目で22項目、大項目で11項目に分類された。それぞれ枚数の多かった項目は、「考えの変容」、「自己の確認」、「将来の自己の課題」という自分自身の確認に関するもの22枚、「対象にあった支援」、「できないところを援助する」、「支援・援助方法は様々」、「見守る援助」、「個人として接する」という障害者の支援方法に関するもの20枚、「障害者の生活」、「障害者の様子」という障害者の生活実態に関するもの17枚、「行動することでコミュニケーションができる」、「コミュニケーションの重要性」、「言葉以外でのコミュニケーション」というコミュニケーションの方法に関するもの17枚などであった。

VI. 考察

本研究では、第一に、初学年次の学生の障害者に対してもっている印象について、実習前、実習後にどのように感じていたのかを把握し、実習による障害者との接触体験がどのように影響を及ぼしたのかを検討した。第二に、実習への期待と結果としての学びを把握し、学生の期待に沿う実習体験ができてきているのかを検

表3 実習前の印象 (計89枚)

()内はカード枚数

大項目	小項目	内 容
感情面 (29)	怖い(13)	怖い(11) 恐ろしい(1) 不安(1)
	暗い(5)	暗い(3) ネガティブ(1) 悪い、酷い(1)
	かわいそう(3)	辛い苦しい思いをすることが多い(1) 元気がない(1) かわいそう(1)
	明るい(3)	明るい(1) 素直(1) 楽しい(1)
	内向的(5)	心を閉ざしている(1) うちに閉じこもっている(1) 内気(1) 受動のイメージ(2)
生活能力 (46)	劣っている(3)	自分達よりも下(1) 何かにおいて劣っている(1) 見下してみられる(1)
	話を通じない人(13)	話をしても通じない人(7) 人の言葉を理解できない(1) 意思疎通が上手く出来ない(1) うまく話したりできない(1) 会話でのコミュニケーションが困難(1) 会話が成立しない(1) しゃべれない(1)
	何も出来ない人(9)	何もできない人(2) 出来ないことが多い(1) 自分一人では何もできない(1) 自分でできることは少ない(1) 一人では普通に生活できない(1)
	援助が必要な人(13)	誰かの援助が必要な人(6) 人の手を借りないと何も出来ない(2) 身のまわりの手助けを必要としている人(1) 援助を受ける人(1) 全面的に援助を求めている(1) 生活の大部分に援助が必要(1) 施設が全て面倒をみている人(1)
	普通の人とは違う(8)	普通の人とは少し違う人(1) 普通の人と同じ(1) 普通では考えられない行動をとる(1) 頭で特別な人間ではないと理解(1) 特別視される(1) 何するかわからない人(1) 知的障害者は精神的に障害がある人(1) 手に負えない人(1)
対障害者態度 (14)	抵抗感(4)	身構えてしまう(1) 抵抗を感じる(1) 気持ちが引く存在(1) 話しかけられると戸惑う(1)
	接したくない(3)	接したくない(1) なんと言葉をかけてよいか分からない(1) 接し方が分からない(1)
	偏見があった(7)	偏見をもっていた(7) 固定観念をもっていた(1) 先入観をもっていた(1)

表 4-1 実習後の印象(計146枚)

() 内はカード枚数

大項目	小項目	内 容
感情面 (33)	明るいイメージ(21)	明るい(14) 明るい笑顔(1) 元気(2) 活発(1) おしゃべり(1) 楽しい(1) 笑顔であふれている(1)
	素直でやさしい(12)	やさしい笑顔の持ち主(1) 人を思いやる心にあふれている(1) 純粋(2) きらきらしている(1) 暖かい(1) 人なつっこい(1) 素直(2) 優しい(2) 障害児が普通の子供のようにかわいい(1)
生活能力 (45)	話が通じる(10)	理解しようと思えば心が通じる(2) ゆっくりきちんと話せば通じる(1) 話が通じる(1) コミュニケーションがとれる(2) 積極的に話しかけてくれる(1) 言われたことは理解できる(1) 笑顔で接すると分かりあえる(1) 体全体で自分の気持ちを表現(1)
	自分のことは自分で出来る人(13)	自分のやれることを頑張っている(2) 自分の力でやれることは自力で取り組む(1) 自分のことは自分でできる(4) 自分のことは自分で工夫してやることができる(1) 自分でやろうとしている(1) 自分でできることは自分でやる(1) 自立している(2) ほとんどのことを自分でやる(1)
	やろうとする意志のある人(10)	できることは器用にできる(1) 与えられたことはきちんとこなしている(1) まじめに掃除し、働いている(1) 上手に作業している(2) 障害をカバーしながら身の回りのことをする(1) 自分でやろうとする意欲は何倍もある(1) 自分でやろうとする意思が強い(1) 自分の意志で自分でできることはやる(1) 自分自身で頑張っている(1)
	援助の必要なときに援助(6)	必要だと感じたときの支えが必要な人(1) 手伝うことの方が少ない(1) できないことに援助が必要な人(1) できないことを気づいて助けてあげる存在(1) QOLを考えた援助が必要な人(1) 施設が自分でできるように手助けしている(1)
	可能性を持っている(6)	不器用な部分を持っている(1) 優れている部分がある(1) 可能性を持っている人(1) 意志のくみ取りが必要(1) 時間をかけるとたくさんのことができる(1) 自分で処理しきれない部分があるため不安定な感情になる(1)

表 4-2 実習後の印象(計146枚)

() 内はカード枚数

大項目	小項目	内 容
対障害者態度 (68)	特別の人間ではない(21)	普通に接することができる(4) 同じ人間である(3) 私たちと何も変わらない(4) ふつうの人(1) 特別な人間ではない(2) 特別意識する必要はない(1) 普通の人と同じ(2) 私と同じように喜怒哀楽を感じている(1) 健常者と変わらない(3)
	真剣な生き方(20)	ひたむきな生き方をしている(1) 頑張っている(1) 力強く生きている(1) 前向きに生きている(2) 何に対しても一生懸命(2) 努力している(1) できないこともやろうとする努力がすごい(1) 自立に前向きな姿勢(1) しっかりしている(1) 一生懸命いきている(1) 一生懸命に作業・生活をしている(1) 真剣に生きている(1) 生き生きとしている(1) 恋する人(1) 苦しみを乗り越え生きている(1) お互い助け合っている(1) 障害と今の現状を受け入れ頑張っている(1) 施設での生活で生きがいを見つけている(1)
	個性をもっている(8)	個性を持っている(2) 自分の考えを持っている(1) 自分のことを理解している(1) 考えがしっかりしている(1) 助けが必要なときは意思表示する(1) 意思が尊重されている(1) 人権が尊重されている(1)
	勇気をくれた(4)	勇気づけられる(1) こちらが元気付けられる人(1) 元気をもらえる(1) 心を温かくしてくれる(1)
	偏見が消えた(8)	偏見がなくなった(2) 壁がなくなった(2) 怖がる必要はない(2) 恐ろしくない(1) 少しこわさがなくなった(1)
	障害をもって社会で生きる(7)	様々な症状の人がいる(1) 障害があつたとしてもやれることはいっぱいある(1) 安定して生活している(1) 社会復帰を目指している人(1) 地域社会を共有している(1) 社交的(1) 楽しんで生活している(1)

表5 実習に対する期待 (計38枚) ()内はカードの枚数

大項目	小項目	内 容
障害者に対して (29)	障害者とのコミュニケーションと接し方 (19)	コミュニケーションとりたい (4) 障害者の気持ち理解出来るようになりたい (1) 温かいつながり (1) どんな気持ちか理解したい (1) 仲良くなりたい (1) ふれあいたい (2) 会話が出来ること (2) 接し方 (7)
	援助方法 (4)	援助方法 (1) 介助の体験 (1) 援助する側に求めること (1) 施設の援助内容 (1)
	自分が役に立つこと (4)	自分が障害者に出来ること (1) 役に立ちたい (2) 役に立つ方法 (1)
	偏見なくす (2)	偏見なくしたい (2)
生活に対して (4)	障害者の生活の実態を知りたい (4)	毎日の過ごし方 (1) どんな生活しているか (1) 何を感じ生活しているのか (1) 生活様式 (1)
その他 (5)	実習態度 (2)	頑張りたい (1) 何でも吸収 (1)
	その他 (3)	不安でいっぱい (2) 考えていなかった (1)

討した。

1. 実習前後の障害者に対する印象について

実習前にもっていた障害者に対する印象は、感情面では大半が、「怖い」、「暗い」、「かわいそう」という印象であり、対障害者態度では「抵抗感」、「接したくない人」、「偏見があった」という否定的な印象をもっていた。また、障害者の生活能力の面では、「話が通じない人」、「何も出来ない人」、「普通の人とは違う」という、障害者に対する誤解や偏見が表われていた。本研究は、実習後の調査であり、学生自身が実習前後での変化を意識し、実習前の印象としてネガティブな面が強調されることが考えられる。本研究の対象の約81%は入学前までに程度の差はあるものの障害者とのふれあう体験をしている。この結果からみても、それらは、否定的または偏見を減少させる体験として現在まで継続されるには至っていなかったと考えられる。

実習後にもった障害者に対する印象は、感情面では「明るいイメージ」、「素直でやさしい」、生活能力の面では、「話が通じる」、「自分のことは自分で出来る人」、「やろうという意志のある人」、対障害者態度の面は「特別の人間ではない」、「真剣な生き方」、「偏見が消えた」など、障害をもって社会で生きる姿を肯定的な印象で捉えていた。このことから、実習を通して障害者を身近に感じ接することで、ありのままの姿を素直に受けとめることができたと考えられる。

さらに、学生の障害者に対してもっている印象の特性について実習前と実習後とを比較してみると、感情面では怖い・暗いから怖くない・明るい・素直でやさしいと、肯定的なものが多くみられる。生活能力の面からみると、話が通じない人・何も出来ない人・援助が必要な人から、話が通じる・自分のことは自分で出来る人と、能力を認めるものが増加している。そして対障害者態度の面では、抵抗感、接したくない、特別の人間ではない、真剣な生き方、個性をもっている、偏見が消えた、という肯定的なものが多くみられる。このように学生は、3日間という実習期間であっても表2にあるような障害者援助の見学と実践という障害者との接触体験をもち、肯定的な印象へ変化したことが考えられる。

障害者への偏見を減少させることに接触体験は重要であると報告されており^{2)~6)}、その接触体験も「知識提供アプローチ」より行動的側面に働きかける「相互作用アプローチ」が有効であると報告されている⁶⁾。また、看護学教育において、看護学生が、障害児を理解する有効な方法として障害児との意図的な接触体験は必要不可欠¹⁾としているが、本研究においてもそれは裏打ちされたといえる。また、カンファレンスなどで学生の気づきを押さえることはさらに学びを深めることにつながり¹⁾、本実習においても施設職員や指導教官の意図的・教育的関わり、カンファレンスなどは、

表 6-1 実習からの学び (計130枚)

()内はカードの枚数

大項目	小項目	内容
自分自身の確認(22)	考えの変容(6)	イメージを改めた(1) 考えが柔らかくなった(1) 壁を感じなくなった(1) 偏見がなくなった(1) 先入観に気づいた(1) 手伝うことのみにとらわれていた(1)
	自己の確認(8)	人間相手の職業(1) 実習の意図(1) 自分を見直す機会(1) 実習で自分なりの答えを見つけた(1) 私の道は間違っていなかった(1) 人が好きなのだろうかという疑問が解決した(1) ノーマライゼーションの実感(1) 障害とは、を実感(1)
	将来の自己の課題(8)	人の役に立つには学ぶことがたくさんある(1) 看護学を頑張る(1) 偏見をなくしたい(1) 看護学習に対するモチベーション(1) いろんな人と接したい(1) 壁がないことを伝えたい(1) 障害者を支える大きな人になりたい(1) 相手の気持ちを表情や発言から理解していこう(1)
支援方法(20)	対象にあった支援(3)	援助の必要(1) 必要な手助け(1) 一人一人をみる(1)
	できないところを援助する(6)	努力できる場(1) できるところは自分でやる(1) 自立への支援(1) 一緒にやっていることが大事(1) できないことだけを援助(2)
	支援・援助方法は様々(4)	支援や援助の方法は様々(1) 様々な介助、援助(1) 援助の仕方(1) 車椅子の押し方や注意すべき点(1)
	見守る援助(4)	見守ることも援助(3) 見守ることの大切さ(1)
	個人として接する(3)	個人として接する(1) 生き方のサポート(1) 障害者の生き方(1)
障害者の生活実態(17)	障害者の生活(8)	明るいものにしよう(1) 日常生活(1) 楽しそう(1) 生活が静か(1) こだわりの生活(1) 生活の様子(1) 生活の仕方(1) 障害者の生活(1)
	障害者の様子(9)	障害者の特質(1) どのような人(1) 何も答えてくれない(1) 明るいやしゃべらない人(1) 話せるようにならない人(1) 表現の仕方(1) 自分でできる(2) いい人(1)

表 6-2 実習からの学び (計130枚)

()内はカードの枚数

大項目	小項目	内容
コミュニケーションの方法(17)	行動することでコミュニケーションができる(7)	行動に移すことが大事(1) 話かけることが大切(1) 話しかけてもらうことで話が広がる(1) 会話ができた(1) 話しかけてくれて仲良くなった(1) 受け入れられた(1) 話しかけられた(1)
	コミュニケーションの重要性(6)	コミュニケーションの仕方(3) コミュニケーションの重要性(1) コミュニケーションの難しさ(2)
	言葉以外のコミュニケーション(4)	笑顔は大切(1) 言葉以外のコミュニケーション(1) 表情でコミュニケーションがとれた(1) 笑顔で話をするのができた(1)
相手の立場にたって考える(14)	心に耳を傾ける(9)	悲観的な思い(1) 気持ちは理解できなかった(1) 気持ちを考える(1) 内面的な事(1) 笑顔や会話を求めている(1) 理解することは難しい(1) 相手の理解(1) 気持ちをくみとる(1) 耳を傾けるのができた(1)
	相手の気持ちにたつ(5)	障害者の考え(1) 相手の気持ち(1) 相手の意見(1) 車椅子の乗る側と押す側の気持ち(1) 性格や気持ちを察する(1)
接し方(12)	障害者との接し方(4)	接し方(4)
	接する時のこころ構え(8)	知的障害者への接し方(1) 接する時の注意(1) 楽しく接する(1) 接するのにマニュアルはない(1) 過去を受け止める(1) 接する時のけじめ(1) 気配りと思いやり(1) 心を開くことが大事(1)
ふれあい(8)	ふれあいの重要性(8)	ふれあうことの大切さ(1) ふれあうことも看護(1) 関わり(1) ふれあい(2) 障害者の笑顔で優しい気持ちになれた(1) ふれあえた(2)
自分と同じ(7)	自分と同じ(7)	自分たちと同じ(3) 自分たちと変わらない(1) 一人の人間(1) 特別な接し方ではない(1) 自分でできないことは求めない(1)
職員の姿勢(7)	職員の考え方や行動(7)	対応の仕方(1) 施設の医療形態(1) 医療職の仕事内容(1) 職員の信念(1) 厳しさの裏にある愛情(1) 優しさのうちにある希望(1) 行動や考え方(1)
病気の知識と観察(4)	病気の知識と観察(4)	病気の知識(1) 職員を手本(1) 自分で考え動くこと(1) 体調の観察(1)
役たてた喜び(2)	役たてた喜び(2)	喜んでいる顔を見れた(1) 食事の手伝いがあった(1)

有効であると考えられる。

山内⁷⁾による障害者理解の枠組みに、今回の障害者福祉援助実習での学生の実習前と後の印象の変化を以下のように当てはめて考えることができる。障害者、相手を理解しよう(みよう)とするときは、それまでもっていた「障害者」をみるネガティブな枠組みを利用しようとする。対話、作業を一緒に行う、車椅子の操作体験などの協同による相互作用を始めると、主体的に相手に関わる体験の中で、学生は、はじめのネガティブな枠組みと異なる相互作用の中で作られる枠組みとの葛藤が生じ、相手の行動にとまどったり、相手と自分との関係を見直したりするという動き「ゆれ」を体験し、お互いの理解や好意を導き、接触相手をみる枠組みをポジティブな方向へ変化させると同時に、確かな、実感のあるものにする。その後においても変化した枠組みで障害者をみるようになるというものである。看護学生の障害児に対する実習終了直後と数ヶ月後のイメージは大きく変化せず好意的な見方が継続されるという報告がある⁸⁾。本研究の対象学生の障害者に対してもっている印象が時間の経過と共にどのように変化していくのかについて検討する余地がある。

2. 実習への期待と実習からの学びについて

実習に対する期待としては、コミュニケーションと接し方、援助方法、障害者の生活実態などが挙げられており、実習への前向きな姿勢を持っていたことが分かる。しかし、記述数があまり得られなかったことは、実習後の調査であったことと学生個々によって設問の捉え方にばらつきがあったこと、また、入学後6ヶ月の時点であり看護や医学の専門的知識がほとんどない状況であったことから、実習そのものに対するイメージがつきにくかったことが考えられる。

実習からの学びとして、分類した大項目の中でカード数の多いものでは、「自分自身の確認」が最も多い。この時期、開講されている授業のほとんどが一般教養科目であり、看護を学ぶ実感や自分の学習の目標や方向性が薄らぐ時期でもある。しかし、障害者との関わりから自分自身の障害者に対する理解や考えが変容したに加え、この実習をきっかけに、看護学に進んだ自分自身を見つめ直し、自己の課題や目標を再確認することができた学生もいる。さらに、その関わりから、「障害者の生活の実態」や、彼らが必要とする「支援方法」を学ぶことができおり、「コミュニケーションの方法」についても、それまで障害者に対し抵抗感や誤解があった分、自らが障害者と関わるることによってコミュニケーションの必要性和重要性を理解できたと考えられる。

看護系短大2年次の小児看護学実習の一環として実

施された、重症心身障害児施設見学実習における学びの報告では¹⁾、「対象理解」に関する記述が最も多く、その内容として「コミュニケーション方法」、「情緒面(気持ちや意志がある)」といったことが挙げられており、「学生は、障害をもちながら生活している対象と一人の人間として関わり、共感し、患者の理解に努め、看護の基本的な考えと看護者のあり方を学ぶことができていた。」としている。本研究とは対象や実習目的も異なるものの、実際に障害をもつ人と関わることは、改めてその対象を理解し、個々の学びを深めることにつながると考えられる。

一方、実習の期待と実習からの学びを照らし合わせると、実習への期待として挙げていたものは概ね学ぶことができていたといえる。また、実習への期待の記述に対し、実習の学びに対する記述内容が多岐に渡っていることから、期待していたことに留まらずそれ以上に学びを深め、自ら広がりを持たせることができたと考える。さらに、3日間という短期間の実習ではあったが、実習目標に挙げられている、障害者に対する学生自身の理解や認識を明らかにすること、生活する人のニーズとして対象の必要とする援助を捉えることができていたと考えられる。

最後に、今回の調査では、学生個々の印象の変化や学びの状況についての内容分析の報告には至らなかった。それらを含め今後、継続調査を実施し講義や実習体制の課題としたい。

VII. 結 論

本看護学専攻初年次における障害者福祉援助実習の前後において障害者に対して持っている印象と実習を通しての学びは、以下の通りである。

1. 実習前後の障害者に対する印象について

実習前にもっていた障害者に対する印象のほとんどは否定的な印象であったが、障害者援助の見学と実践という障害者との接触体験をもち、実習後は大半が肯定的な印象となった。

2. 実習への期待と実習からの学びについて

実習に対する期待としては、記述数は少なかったものの、コミュニケーションと接し方、援助方法、障害者の生活実態などが挙げられ、それぞれ概ね学ぶことができていた。

文 献

- 1) 関森みゆき他：重症心身障害児施設見学実習における看護学生の学び。信州大学医療技術短期大学部紀要25巻、29-37、2000。
- 2) 奥宮暁子：看護学生の障害者観。日本看護科学会誌12

- (3), 20-21, 1992.
- 3) 明智麻由美：看護学生の対障害者態度の変化に関する研究(第一報)－看護学生の障害者との接触経験と態度－. 聖母女子短期大学紀要13号, 129-134, 2000.
- 4) 谷まり子他：看護学生の重度の障害児に対するイメージの変化－実習前と実習後の比較－. 第27回日本看護学会(看護教育), 87-90, 1996.
- 5) 舟越和代他：看護学生の重度障害児に対するイメージの変化－実習後の追跡調査を実施して－. 看護教育38(8), 660-664, 1997.
- 6) 藤井達也：大阪府における精神障害者についての地域理解促進の戦略 http://www.jassw.jp/17th_apswc/PDF/sessionC/CJ_7_4_fujii_tatsuya.pdf (accessed 2004-1-19)
- 7) 山内隆久：対人接触による障害者に対する偏見解消. 現代のエスプリ384号, 205-215, 1999.
- 8) 阪口しげ子：看護学生の障害児に対するイメージの変化－入学時から卒業時までの縦断的分析－. 日本看護学教育学会誌13巻, 246, 2003.

文 献

- 1) 高橋典子：重症心身障害児に対する学生のイメージの変化－実習前後のアンケート調査から－. 聖母女子短期大学紀要14号, 75-81, 2001.
- 2) 出口禎子他：基礎看護学における見学実習の意義－学習の動機を高める臨床からの学び－. 東邦大学医療短期大学紀要第10号, 51-61, 1996.
- 3) 奥宮暁子：学生が「障害(者)」という用語から想起することについて－看護・理学療法・作業療法学生の比較－. 第24回日本看護学会集録(看護教育), 152-155, 1993.

Students' Impressions of Handicapped People and Subsequent Learning through Practical Study of Handicapped People's Welfare

Makiko Nagaoka* Masako Yamaji* Sakiko Ogasawara*
Fujiko Miyakoshi* Nobuko Ikeda* Michiko Yanagiya**

* Course of Nursing, School of Health Sciences, Akita University

** Department of Nursing, International University of Health and Welfare

As part of the practical programme for first year students studying human service, 70 first year students (62 female, 8 male) of the course of nursing spent three days in September, 6 months after starting the course, studying welfare in institutions for the physically or mentally handicapped. A questionnaire survey was conducted into students' attitudes towards handicapped people before and after their practical study, as well as their expectations and learning throughout the period of study. Most students held negative impressions of handicapped people before the practice. However, these impressions increased to become positive following contact with handicapped people through observation or practice of assistance. Few students recorded their expectations for the practical study, but communication and contact methods, methods of assistance and the actual situation of handicapped people were mentioned, indicating that the students had learned through their engagement with the handicapped people. From the varied reports concerning the students' learning it can be surmised that the students exceeded expectations in the breadth of their learning and personal development.